

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会

第 5 回 ・ 1F 地域塾
議事録

開催日時：2022 年 12 月 10 日（土）13:00-18:00

会場：ふたば未来学園、Zoom ミーティング

参加者数：38 名

総合司会：小磯匡大（ふたば未来学園、副塾頭）・鈴木知洋（ふたば未来学園、副塾頭）

プログラム

- 13:00-13:10 第1期1F地域塾の発足にあたって
松岡俊二（塾頭）
- 13:10-13:40 「小さなものから、大きなものへ」
高原耕平（創造的復興研究会・文化班主査、人と防災未来センター・主任研究員）
- 13:40-14:00 「『地域を解体する』ことに対するアプローチ」
秋元菜々美（1F地域塾・運営委員、F-ATRAs、富岡町）
- 14:00-14:20 「東京電力グループの取り組み：原子力事故の事実と教訓を伝える全社員研修」
上川直大（東京電力・安全推進室/安全啓発 GM 兼安全啓発創造センター）
- 14:20-14:50 グループ討論内容の予告
（10分休憩）
- 15:00-16:30 グループ「対話の場」
（10分休憩）
- 16:40-17:50 グループの対話の紹介・報告及び全体の「対話の場」
- 17:50-18:00 まとめ

1. 報告後の質疑応答

高原：秋元報告では「解体するまち」「漂流の民のまち」「地域」などの表現があり、「まち」と「地域」が重なっているが、使い分けられているだろうか。もう一つ知りたいのは、記憶伝承のために、なぜ身体的な演劇という方法を選んだのか。

秋元：「まち」は、富岡町が「町」になる以前のところとして捉える部分が大きい。「地域」は、富岡町だけではなく、周辺の町村も含めている。それぞれ違う地域性を持っているが、地域性はどの町でも探求していると感じた。その普遍性の考え、「地域」という言葉を使った。

なぜ演劇を選んだかという、現地にきて体験するのが大事だと思う。普通の演劇と違い、参加者がツアーの中でだべりながら移動する部分も演劇の一部である。馴染みのない地域に来て、語られていることを自分で解釈して、その後少しずつ消化することによって、どんどん自分の身体が町に溶け込まれる。その感覚が参加者に起きたらいいと思い、演劇という形式を選んだ。

上川（東京電力）：報告の中で、地域がどんどん解体していくことに危惧するという話があった。解体が進む中で、秋元さん自身が何か解体しないように働きかけていることがあるか。

秋元：どうしても解体されたくないものと言え、自分は 2F を残してほしいと 2 年前から言っていた。生まれた時からそこにあるものがなくなってしまうたら悲しいと思う。やはりこの地域は、エネルギー生産ということに誇りを持っていた。

松岡(塾頭)：今までの意見を踏まえて、ご自身の感想を伺いたい。

秋元：自分自身は演劇のリサーチと上演する中で、何度もこの地域と出会い直して、発見して、地域の可能性を改めて感じている。自分もそれに立ち会いたいと強く思う。自分から広げられる手は大きくないが、こういう見方をいろいろな人と共有できたらいい。みんなで一緒にこの地域を解釈することが大事である。

2. 報告後の各グループの感想

井出(運営委員、A グループ司会)：グループ討論で「伝承」をキーワードに議論できればいいと思う。高原報告の通り、「噛み合わない」ことが重要な考え方であり、松岡報告にあった「エンパシー」にも繋がると思う。

高垣(運営委員、B グループ司会)：3 本の報告では、事故の記憶伝承についてアカデミックな視点、地域住民の視点、東電の視点から紹介された。私は最近南太平洋のマーシャル諸島とフィジの立場から、福島原発事故と処理水の海洋放出の問題に対する考え方に関心を持っている。核実験をたくさん受けてきたこの地域は、記憶伝承をどうしているのか。自身は広島出身であり、広島視点からも福島の記憶伝承を皆さんと対話したい。

菅波(運営委員、C グループ司会)：東電の研修は「事実と伝承を伝える」と報告で紹介された。裁判をしている弁護士として、事実は人によって見方がかなり違うと感じていて、何に依拠して「事実」を捉えるかが気になる。何のために私たちが集まって対話するのか、1F 廃炉の先を考える本当の目的とは何か、それについてみんなで議論して共有したい。考え方が兼ね合わなくても全然気にせずに、対話を積み重ねることが大事である。

森口(副塾頭、D グループ司会)：高原報告に、記憶物語の主体という話があった。自分が語るものを持っているか、聞く側にいたいのか、伝える側にいたいのか。自分は当事者としていろいろ関わってきたので、語りたいことはたくさん持っているが、聞いたり伝えたりすることができていないように思う。それについてグループで討論したい。

秋元さんから 2F を残したいという意見があった。1F 廃炉の先を考えるのは難しいが、2F も含めて、地域の将来を考えることができるのではと思う。

上川報告を聞いて、東京電力の当事者、あるいは避難住民の記憶がどのくらい伝承されているのかを考える。中間貯蔵の除去土壌の再生利用は所沢の環境省研修所、新宿御苑と国立環境研究所の三カ所で進めることになっている。今の環境省の担当者が数年前に福島の問題を対応した人だが、福島の経験から伝承されてないと感じた。人の経験の伝承も大事だと考える。

崎田(副塾頭、E グループ司会)：高原報告は継承から伝承に広がり、技法の多様性、対話の安全性、物語の主体性というキーワードが印象に残った。秋元報告は、地域の歴史をツアーと演劇を通じていろいろな人と共有し、将来のまちづくりを考えるという伝承の取り組みが印象的だった。上川報告で安全というキーワードが出て、社員が安全文化に本気で取り組むことには印象が深かった。福島の将来にどう関わるのかという質問を踏まえながら、多様な立場を持つ私たちがどのように原子力災害の記憶を継承していくのか、取り組みでこの継承を考えて、1F 廃炉の先は何を目指すのかななどを討論したい。

井上(副塾頭、Fグループ司会)：今日の報告で印象に残ったことを話したい。一つは、高原報告にあった伝承と継承の話である。以前アウシュビッツのチクロンのガスを入れられた半地下のところに行った時体が震えるのを感じた。福島記憶をどのように伝承/継承するかを話したい。そして、秋元報告では、地域を解体して新しく作り直す中で、地域への愛着も壊されてしまうという地域からの声があった。福島の再生について皆さんの意見を伺いたい。最後に、上川報告で話した安全文化も印象に残った。自分はずっと原子力業界にいて、昔から安全文化を言ってきた。しかし、以前と現在のものが違うかもしれないと実感した。それについて議論したい。また、東電の役人層も研修に参加しているかが気になっている。

3. グループ発表

A グループ

- ・Aグループは「伝承」をキーワードにして議論した。その中で、今回のような5～6名ぐらいのグループで話し合う場が非常に重要であると感じた。双葉郡にみんなで話し合う機会が少なく、他の人の意見がどうなるかが気になっていた。こういう自分の意見を素直に交換できる場が非常に重要である。そして、本日の対話には地域住民だけでなく、国や東電も参加していて、多様な人がいた。それはある種のネットワークの形成に繋がるのではと思う。
- ・グループ討論で、話すことによって震災に関するネガティブな記憶を肯定化させることができるという意見があった。つまり、ナラティブセラピーのように、自分の物語を語ることで自己を形成するというプロセスが非常に興味深い。自分の震災当時の記憶をネガティブな意味合いとして捉えるのではなく、言語化を通して自分自身回復させる。広く言うと、被災者の回復するための術の一つにもなるだろう。

B グループ

- ・原発事故から11年経った今、地元には原発の廃炉や遺構の保存について対話する場がまだ存在しない。国のNDF主催の国際廃炉フォーラムはあるが、地域では廃炉の話はしない。日本では廃炉完了の原発の事例がなく、そもそも全部壊すことが安全なのか。なお、廃炉に伴って大量の廃棄物が生じるため、遺構をある程度保存したら、廃棄物の量が少なくなるのではと考える。
- ・あらゆるトラブルは最終的に人的なミスに還元されていく。個人がどんなに努力しても事故は起きてしまう。それが、原発事故から得た一つの教訓であろう。(東電の研修について疑問を共有した。)
- ・東電の研修プロジェクトは、机上での研修だけでなく、福島の現場に来てほしい。現場を見ることで、安全の大切さを実感してくるだろう。
- ・秋元報告の通り、フィールドワークが大事である。フィールドワークは最大の対話の機会である。自分五感で感じたり、参加者同士で信頼関係を築いたりするような機会をより多く作ることが必要である。
- ・富岡町の建物がどんどん壊されていく。現在、解体だけに補助金がかけられ、保存やリノベーションには補助金がない。また、双葉町では解体と除染が同時に進められている。決まった期間が過ぎると、自費で家の解体をしないとイケない。そのような制度的な問題が、伝承の阻害要因になっている。

C グループ

- ・秋元報告で紹介されたフィールドワークの実践が、何か明確なメッセージや教訓を伝えるのではなく、地域で解体や建設を繰り返していいだろうかという問いを感じさせる取り組みだった。地域で何を残すか、何のために残すか、それは誰のためのまちづくり作りなのかという問題の捉え方とは大きく関わる。
- ・事故は東電だけが起こしたわけではない。私たち一人ひとりが目指す地域の将来像を再考することが大事である。エンパシーを養うことができる地域になるために、アートが必要になるのではと思われる。
- ・事故をしっかりと振り返ることができたら、そのプロセスから伝承や教訓が得られるだろう。私たちはやはり教訓を探している途中である。アートの力を借りることで人々に問いを感じさせ、それから問いに向き合うことになるという。一人ひとりが大事にされる地域になるためにどうすればいいか、みんなと一緒に考え、協力する仕組みができたらと思う。
- ・オンライン会議の際に、時々匿名の参加者がコメント欄に率直な意見を書き込むことがある。現実生活

でなかなかそのような正直な気持ちを語りにくい。匿名だからこそ本音を言い出せることは、逆の意味で興味深い。

- ・最適解がなければ、納得解を目指したほうがいい。

D グループ

- ・グループに中学生の塾生もいた。中学生から汚染水について質問し、同じグループの漁師と経済産業省の担当者が処理水問題における一番の当事者として丁寧に質問に答えた。このようないろいろな立場の人が集まり、冷静に話すことができる安全な対話の場が成り立っていると改めて実感した。
- ・津波被災地の石巻市出身の塾生がいたため、津波被災地の伝承/継承と原子力災害の被災地の福の伝承/継承との共通点と相違点を話した。当然、震災事故直後のことの伝承・継承も必要であるが、それ以降の11年間でいろいろなことも伝承・継承しなければならない。津波被災地では、遺構を保存するかどうかを議論した結果、何を学ぶために残すのかをしっかりと考えるべきであるということになった。
- ・秋元報告で2Fの話が出たが、2F、あるいは1Fの5号機、6号機を何かの形で活用できるかを考えたい。特に今、地域の定住人口がなかなか増えない中で、地域の文化の継承が問題になる。秋元報告は、地域とよそ者との協力を提案している。この地域塾にも外から来て参加した「よそ者」が少なくない。いかに地域内外の協力を形成するかをよく考えないといけない。
- ・行政の関与する程度についても話した。国は責任を持ってサポート役であるが、誰が主体的に地域のことを考えて決めるのか、町の首長が判断していいのか。高原報告にあった「当事者性」はよく考える必要がある。

E グループ

- ・原子力災害の記憶継承と1F廃炉の先というテーマを真正面から話そうとして、グループ討論をした。討論の結果、遺構の保存自体も大事であるが、どのように遺構を活用しながら地域の元気を取り戻すかというソフト面の問題も大事であることを再確認した。
- ・秋元報告では、バリケードのような非常に物々しいものが解体されずに残っていたほうが、地域の記憶が思い出せるのがいいとの話があった。一方、放射線の問題やコミュニティの分断などの悲しみもあり、何をどう展示するか、何の形で残すか、それらの問題も考えなければいけない。また、上川報告から、今東電が安全文化の継承のために頑張っていることを知った。これから社内に限らず、地域社会とも安全文化を交流してほしい。
- ・ハードとソフトの連携によって、伝承しにくい思いも将来に伝えられる。例えば、高校生のような今の世代が、11年前にどういう思いだったか、これまでの11年間はどのように過ごしてきたのか。その記憶を記録に残して継承していく必要がある。また、ハード面を整備する中で、廃炉の将来像への期待のようなソフト面の思いについても話すのがいい。例えば、東電は今視察を多く実施している。視察後の意見交換会で、1F廃炉の将来に関して視察参加者と率直に意見交換をしたらいい。
- ・しっかりと話せる場を作るのが大事である。伝承のためのハードとソフトの連携をどうすべきか、復興の将来像など、みんなで一緒に議論する場づくりが非常に重要である。

F グループ

- ・正しく伝承するということとは何か。特に1Fはいろいろな数字が出ている中で、正しく物事を伝える必要がある。
- ・技術の伝承には継続性が必要である。しかし、関係者の配置転換が適切に行われているのかとの疑問があった。
- ・中間貯蔵はこれから何をどのように残すのかは、今中間貯蔵の関連会社で、新しい業務センターを立ち上げ、そこを充実させようとしているところである。
- ・文化の継承が大事である。必ずしも物理的なものだけではない。地域外に避難している人が多くいるため、避難先で文化を継承するのも1つの方法なのでは。
- ・地域の再生は、地元で合意形成が最も重要である。そのため、合意形成の場を作る必要がある。行政が前に出ると話が進みにくいかもしれないので、最初は非公式な形で、民間が主体となって進めるのがいい。

い。多様な年齢層、地域住民、専門家などいろいろな人を包括した、合意形成ができる場をできるという。なお、地域づくりは、実際に地域に住む人だけで決めていいのか、それとも避難先から戻っていない人も関わるべきかという議論もあった。

- ・国では福島でイノベーションや教育拠点を立ち上げる政策がある。それに地元が関わらないといけない。地域より社会へ何を発信するのか、地域に何を還元できるのか。これらについて全国に発信する必要がある。一方、最初は魅力を作り、人々に行きたいと思わせる方法もある。特に、浜通り地域では、人口が減少し、原発の廃止に伴い雇用も減っていき、今後さらに過疎になる可能性があるから、積極的に外から人を受け入れ、新しい文化を作ったらい。
- ・上川報告で東電の研修や地域貢献の活動が紹介されたが、経営層はそれらの取り組みにちゃんと参加しているかとの疑問があった。

4. 総合討論

高原：「当事者性」と「主体性」はかなり重なるが、微妙に異なる部分もある。整理できていないため、またリプライさせていただければと思う。報告で「safety」を話したが、今回の地域塾は安全だったか、塾生の皆さんに伺いたい。私はCグループに参加した。安全の場だと思った。ただ、この独特のふわふわ感が大事だと思い、そこにチューニングするのに精一杯で、他の人が安全を感じるかに気を配る余裕がなかった。安全なコミュニティであるかどうか大事な指標である。もし安全ではなかったと感じたら、松岡塾頭に言っていただければと思う。

上川(東京電力)：机上の研修だけでなく、福島現地にも足を運んでほしいとの意見があった。復興推進活動の取り組みはあるが、残念なことに、コロナの影響で、社員が浜通り地域に出張する機会が減っている。コロナの状況次第だが、福島本部で社員が現地に行く機会は設けることも聞いている。確定していないが、そういった取り組みも研修と合わせて進めていきたい。

経営層や役員クラスの研修への参加について、1巡目の研修には社長以下の役員が参加した。2巡目は役員にも声をかけ、オンラインで参加した。これから3巡目を始めるが、本日いただいたご意見を踏まえ、研修の運営をしたい。

研修は東京電力社内にクローズしてしまっていて、地域社会とともに安全文化を作るべきであるという意見が頭の中に響いた。これからしっかりと考えていきたい。

塾生：東電の研修について伺いたいことがある。以前にも様々なトラブルがあった。福島県民として、トラブルへの対応を注目してきた。その結果、人的なミスが原因であり、安全文化を高めようとするという答えを繰り返してきた。今回の事故では、様々な調査委員会で調査が行われ、刑事と民事の裁判の中で多くの証言や事実が出ている中で、個々人の安全意識に加え、組織が改革されたかも知りたいと思った。個人が現場で最善のことをしようとしても限界があるので、事故が繰り返されないように、組織のあり方の改革も重要である。これは東電だけのことではない。一国民として応援したい気持ちがある。組織としてどういう改革がされているのか。組織がどのように安全対策をしているのかを伺いたい。

岡崎(東京電力)：組織面では分社化されている。事故以前の社長は、全てが守備範囲だった。今ホールディングスになり、東京電力の事業体自体はボリュームゾーンのところの責任を持つ会社がいる。ホールディングの社長は全体を見ながらも、原子力を見ながら、福島のことは1丁目1番地ということを心に刻んで仕事に取り組んでいる。

日比(東京電力)：この10年で経営層の意識が変わったと思う。分社化され、責任が明確化されたこともあるが、ホールディングの社長は福島を常に気にかけてきており、この地域のこともよく把握されている。ただ、まだまだ社員による世間をにぎわすニュースがあり、地域の皆さまにはご心配をお掛けしている。組織の改革はまだ途上であるし、新しい社員にもしっかりと引き継ぐように意識を高める取り組みもしてい

る。当社は原子力発電所の安全に貢献することを使命としている。皆様のご期待に答えられるように引き続き努めていきたい。

松岡(塾頭)：日本航空は 1985 年の日本航空 123 便機墜落事故後、安全文化づくりを苦労しながら、一般公開の安全啓発センター（2006 年開館、羽田空港）を立ち上げた。航空会社と電力会社はもちろん性格が違うが、東電社内に限った内向きな形で安全文化を創ることには限界があると考えている。11 年前の事故により多くの避難者が生まれ、今でも帰れない地域がある。1F 事故は東京電力の問題だけでなく、福島も含めた日本社会としてどのように教訓とし、日本社会としてどのように安全文化を創るのかという共通の課題を抱えている。東京電力、福島の地域の皆さん、日本社会の協働のあり方をみんなで考えたい。

塾生：グループ討論では 1F 廃炉の先のあり方を話した。自分は、できれば現状を残したまま、震災遺構として見られるようにしてほしいと思っている。大きい事故だからこそ、後世に継承しなくてはならないと考える。

森口(副塾頭)：グループ討論の話を少し補足する。1F の遺構を今のままで残したら、環境汚染等の問題が起きる可能性がある。残す場合、安全を確保し、汚染を拡大しないことが可能かどうかという技術的な問題を考えなくてはならない。今はすでに処理水の問題が起きてしまっている。そのため、反対の意見もあった。

塾生：出身、背景、経歴、仕事が異なってもお互いにしっかり話せることを感じつつ、なぜこの場以外ではなかなか話せないのか、モヤモヤを感じた。この話題に触れると、敵や対立が生まれがちになる。こういう話せない現状からセーフに話せる場への橋渡しが必要である。アートがその役割を果たせる手段の一つかもしれない。

塾生：語り部や東京電力の研修は言語化された明瞭な教訓の継承の取り組みである。それは非常に重要なことであるが、継承されるべきものは、言語化された明瞭な教訓だけではない。

人類は常に科学技術によって発展と失敗をしてきた。科学は中立的なものであり、その使い道、目指す目標等は、東電や語り部だけでは決めることができない。コミュニティの全員、全国民、世界中の人がどういう社会を目指すのか、どういうことが教訓だったのか、それについて対話する必要がある。

語ることができる人は、明瞭なメッセージ、強い伝承のモチベーションを持っている人である。大部分の人は明瞭なメッセージを持っておらず、あるいは強いモチベーションがない。様々な人に地域塾のような場に来てもらうことが難しい。秋元報告のようにアートを通して、社会のあり方や原子力災害の教訓について問いを投げかけ、インフォーマルな対話が行うというような努力を積み重ねると、目指すべき社会像も見出だすだろうと考える。対話の輪を広げるきっかけを作りたい。

塾生：自宅の周りが中間貯蔵施設のエリアにあるので、未だに津波の痕跡が残っている。自分はその場所で伝承活動をしていて、メディアで伝わっていない話を伝えるつもりでいる。

この 2 年間、15 歳未満の生徒が入れない場所でオンラインの形で、小学校・中学校に向けて授業してきた。今後は学校だけでなく、東京電力の社員研修のような企業研修の場として活用してもらいたいと考える。例えば、地元の人々の声を聞いてもらう研修の場として利用してもらえばいい。これは社会の問題であるため、東京電力のみならず、多くの企業にそのような場を提供したい。

塾生：安心して語ることができる場の必要性は、全部のグループの共通認識だった。私は 2011 年 6 月から仮設住宅に住み、その後復興住宅に移り住んだ。その時仮設住宅の住民の聞いたことや感じたことを手記してまとめるプロジェクトがあった。しかし、住民は自分が特定され、攻撃されるのを心配し、プロジェクトが頓挫した。「安全に話せる場」は日本や世界の共通課題であり、そういう場を増やす必要がある。

松岡(塾頭)： 本日は第 1 期の 1F 地域塾の第 1 回で、通算 5 回目でしたが、いろいろと考えさせられる深い議論ができた。これらを持ち帰り、また個人個人で学んだり調べたりしながら、次の 1F 地域塾に向け

で多様な可能性を拓いていきたい。

1F 地域塾は方法論ばかりを言っていて、目的がないというクリティカルな意見も頂いた。私は、目的は1つでなくても良いと考えており、皆さんと目的そのものも一緒に考えたい。結論が同じだから同志ではなく、物事の考え方や進め方が同じくすることが同志であると考えている。結論が違って構わない。むしろ、結論が違うからこそ、対話をし、議論をする意味がある。

第1期 1F 地域塾は3ヶ月に1回程度の開催を考えたい。2023年春に第6回を開催予定である。高校生ももっと参加していただけるように調整していきたい。以前から、中間貯蔵や富岡や楢葉のJAEA施設の見学などのコンテンツも議論している。報告者の富岡町の秋元さんのツアーにも、地域塾として参加することを考えたい。また、木村さんたちの大熊未来塾のツアーも地域塾として参加出来たらと考えている。

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、1月29日の第11回ふくしま学（楽）会@大熊町をもって、広域的に活動するという節理の趣旨を踏まえ「早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター」に名前を変更する。

本日は、1Fを遺構として残すかどうかの話題だけでなく、遺構として残した場合、それが地域復興においてどう活用出来るのかというソフト面も議論した。早稲田大学は復興知事業の枠組みでこれまで5年近く活動してきた。これからの持続的な仕組みを築きたいと思い、リサーチセンター活動の企画運営を担うような社会組織を創ることも考えている。是非、皆さんからアイデアや知恵をいただきたい。福島復興と廃炉のための新たな知恵を創造しながらリサーチセンターの活動を進めていきたい。

【第5回 1F 地域塾の会場の様子】



以上